



## 菜種油が地域を動かす壮大なエコプロジェクト

金丸弘美

食総合プロデューサー

料理に国産菜種油を使っている。琥珀色で美しい。鍋に瓶からそそぐと滑らかな光沢をたたえて流れ出す。しつかりした力強い天ぷらがかりとあがる。春の日差しをいっぱい詰めたんだような香ばしさが部屋中にひろがるのである。

我が家で使っている菜種油を絞っているのは鹿児島県肝属郡東串良町の村山製油の村山實盛さんと長男の博隆さんとその家族。もう十五年以上のお付き合いになる。

きつかけは、妻が府中の伯母から「おいしいからりとあがる油を手に入れてほしい」と相談されたことからだった。それは妻の母が元氣なく「おいしい天ぷらが食べたい」と言い出したことが始まりだった。

実は、当時、義母は義姉と関西に住んでいて阪神淡路大震災に遭い、しばらく東京で暮らすこととなって、伯母が食事のめんどうをみていたのである。奄美出身の義母には、東京で購入した油がどうにも口にあわなかったらしい。震災後で元氣のない義母に力を与えるには、彼女が求める油が必要だったというわけだ。

鹿児島島の出身の知り合いから紹介されたのが村山製油だった。かつて鹿児島では菜種が多く栽培されていて、今も菜種油を作っているという。

ところが妻が言うには「国産で菜種を作るところは、もうほとんどないらしいの。このままではなくなってしまう。応援してあげて。とにかく行っ

てみようよ」と誘われて、国産菜種油がどんなものかも知らないままに訪ねたのが始まりだった。聞けば昭和三十年頃には鹿児島には三百軒以上の油を搾る製油所があったそうだが、いまでは四軒しか残っていないという。

理由はカナダから菜種が輸入され大量に安い油が出回るようになったこと、農業で化学肥料が使われ始め、畑に植えられた菜の花や、菜種の油を搾ったあとの搾りかすが肥料に使われなくなったということであった。

村山實盛さんは「昔の菜種の香りが忘れられなくて今も作っている」とのことだった。実際、現場で国産菜種油の香りをかぐまでは、こんなにも香ばしいとは思ってもみなかった。しかし原料の菜種そのものが入手が難しく、わずかにとれる鹿児島と青森の菜種で油を搾っているとのことだった。その菜種油に大きな風が吹き始めた。ひとつは



菜種（上）と搾られてくる菜種油（下）



奥さんのトシ子さんのチラシ効果である。「あなたの菜種を搾りませんか」と、新聞折り込みをしたのだ。

かつて菜種油は製油所が農家が持ち込んだ菜種油を搾ってブツブツ交換で作られていたのだという。それを思い出したトシ子さんが新聞のチラシで呼び掛けたところ「昔の製油をするところがあつたのか」と菜種を持参する人が現れて十五トンもの油が搾れるようになった。今では、二百名近くの人たちから菜種油の搾りを依頼されるようになったという。

そして大きな転機になったのは、平成十三年から隣の曾於郡大崎町で始まった「菜種エコプロジェクト」との連携である。

大崎町では循環型社会の取り組みを平成十年から開始した。将来のゴミ埋めたてがやがて不可能になる。またゴミ処理場を作れば処理費用も膨大にかかる。そこで、すべてのゴミを資源化しようとする方針を大転換させた。住民説明を一年がかりで行い、資源ゴミの分別化と生ゴミのたい肥化を推進したのである。

その一つが菜種栽培奨励だった。菜種の花、つまり菜の花は黄色い可憐な花を畑一面に咲かせる。景観作物になる。花からはミツバチが蜜を採る。そして、菜種は油がと

れるし、搾ったカスは上質な肥料として使える。

一般家庭から出た生ゴミはリサイクルによって堆肥化され、菜種栽培や農家の肥料として使うという活動が始まった。生ゴミと資源ゴミに分類することとなった。そして菜の花から生まれた種は、お隣にあつた村山製油に依頼がされて、町との連携が始まったというわけだ。

生ゴミは回収されると枝葉四と生ゴミ一、それに乳酸菌を入れて発酵させて、半年かけて堆肥化される。それが町内の菜種栽培に利用される。収穫された菜の花の種が村山製油で絞られて、大崎町で一般家庭用として販売され、また学校給食で使われたりしている。

家庭用の廃油は、こちらも回収されて、BDF（ディーゼルエンジン代替燃料）としてゴミ収集車の燃料に使われているのである。

そして大崎町は、平成十八年度環境省「一般廃棄物処理事業実態調査」において全国第一位に選ばれたと知ったのである。ゴミリサイクル率がなんと八十パーセントを達成したという。

ちなみに第二位は長野県筑北村で七十六・六パーセント、第三位は徳島県上勝町で七十五・五パーセントである。全国平均が十九・六パーセントというから驚異的なりサイクル率である。

大崎町は、二十八のゴミ分別がされていて、地元(南)そおりサイクルセンターに生ゴミと資源ゴミにわけて、二か所あるセンターに別々に持ち込まれる。センターの担当の方によると、「大崎町から持ち込まれる資源ゴミは、こまかく住民段階で分類されているので、九十九・九パーセントがリサイクルされます」とのことであつた。

菜種油を探しに行った旅から、小さな製油所地域全体につながるエコプロジェクトへと大きな広がりをもたらしていることを知って、すっかり嬉しくなったのだつた。こんな取り組みが全国に広がれば、どんなに素敵だろう。